『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

岩坪　健

本稿は『源氏流極秘奥儀抄』の桐壺（『源氏物語』第一帖）から花散里（第一一帖）までを掲載する。各帖の担当者（丹羽雄一、嶋中佳輝、橋谷真広、八木智生、湯本美紀、溝口利奈）は、すべて本学博士課程在学者である。

本書は真・行の二冊からなり、真の巻は『源氏物語』五四帖のあらすじ（末尾に巻名歌）(1)、行の巻は「御伝」（足利義政の花論）に「愚按」（千葉龍卜の解釈）を加えるという形式で各帖の活け方を記す。二冊とも巻頭に正蔭の序文、巻末に大嶋宗丹の署名・落款があり、いずれも大嶋靖彦氏蔵である。行の巻の序文には、末尾に「安政辰の年」と記され、安政三年（一八五六）の写しと知られる(2)。

行の巻のうち秘伝の六帖(3)を除く四八帖について、明治から大正にかけて前賀松泉が図解した草の巻（前賀一泰氏蔵）がある(4)。掲載を許可していただいた大嶋靖彦氏・前賀一泰氏には深謝し申し上げる。

注

(1) 巻名歌とは、一巻に詠まれた和歌のうち巻名を含む一首、または当巻を代表する名歌一首。

(2) 本書を最初に紹介されたのは、木曽こころ氏である。詳しくは、『没後100年記念　企画展　大嶋黄谷』（赤穂市立美術工芸館

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

田淵記念館、平成一六年一〇月）、『源氏流いけばな』（赤穂市立歴史博物館、平成二七年一一月）の解説を参照。

(3) 注(2)の『源氏流いけばな』、岩坪健著『源氏物語の享受―注釈・梗概・絵画・華道―』（和泉書院、平成二五年）第四編第三章の六を参照。

(4) 注(2)の『源氏流いけばな』参照。

凡例

一、翻刻は原文のままを原則として、誤字・脱字・濁点・当て字・仮名遣い等も底本の通りにしたが、読解や印刷の便宜を考慮して次の操作を行った。

1　句読点を付け、会話文などは「　」で括り、底本の旧漢字・異体字・略体は通常の字体に改めた。

2　誤写かと思われる箇所には、右側行間に（ママ）と記した。読めない個所は□で示した。

一、真・行・草の巻の順に翻刻する。なお紙面の都合により、草の巻の図は割愛した。次いで各々の現代語訳、そのあとに注釈を付す。各帖の末尾に、担当者の氏名を示す。

一、【訳】の欄には、翻刻した古文の現代語訳を置く。なお理解を助けるため、主語などの補足または語釈などを設け、それらは（　）内に入れる。なお、真・行の巻名と、草の巻の現代語訳は省略する。

一、【注】の欄には翻刻した古文の注釈を設け、注釈した箇所は古文に通し番号（1以下）を付す。

1　注釈本文に挙げた和歌には、『新編国歌大観』の歌番号（ただし万葉集は旧番号のみ）を示す。

2　注釈本文に挙げた古文には、『新編日本古典文学全集』のページ数を示す。

3　前掲の巻に記した注を指す場合、その巻名の頭に巻の通し番号（1～54）を付ける。

一、本書と関わる作品を取り上げ、略称で示す。

○『小鏡』…『源氏小鏡』の略称。南北朝時代に成立した源氏物語の梗概書。本文は、岩坪健編『「源氏小鏡」諸本集成』（和泉書院、平成一七年）に収めた整版を使用。なお連歌に使われる言葉を「寄合語」と言う。

○『龍野』…龍野の円尾祐利が天保九年（一八三八）に著わした『源氏五十四帖之巻』。岩坪健著『源氏物語の享受―注釈・梗概・絵画・華道―』（和泉書院、平成二五年）に翻刻あり。

○『六帖』…円尾祐利が『源氏五十四帖之巻』に収めなかった六帖。岩坪健著『源氏物語の享受―注釈・梗概・絵画・華道―』に翻刻あり。

一　桐壺

1桐壺は大内に有御殿の名也。2光君の御母、此殿におはしましけるによりて、桐壺の更衣となづけたてまつれり。3此更衣の御腹に若宮やす〳〵と御誕生有て、4玉のやうなるをのこ御子産給ふ。光君といふ也。ほどなく十二歳の時、御元服し給ふ。其儀式いかめしく、葵の上と御婚礼あり。5御父君を桐壺の御門と申也。

6いとけなき初元ゆひに長き世を契る心はむすひこめつや

源氏流極秘奥儀鈔

松応斎法橋千葉龍卜

桐壺

御伝曰、7是は桐壺といふ名によりて、桐を生る也。8桐、鳳凰は聖代ならでは出ぬ位あるもの也。9御簾の花、第一の

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

習とせり。祝義にもちふべし。

愚按、曰、桐壺更衣に手車[10]の宣旨といふ事あり。小車[11]といふ草、縁あり。又、三位[12]のくらゐ、おくらせ給ふ。是は桐壺、長く此世を去給ふ時の事也。仏花と心得へし。又、桐壺帝[13]、母北の方に源氏、若宮にてまします時、靫負命婦を使として給はりし歌、

みやきのの露吹むすふ風の音に小萩かもとをおもひこそやれ[14]

といふ時は必、萩を生る也。又、源氏[15]、七の御年、御文始とて御学文始あり。琴笛の音にも雲井をひゞかすと有。此時は必、松を主として生る也。松は琴[16]に通ふ。下准レ之。又、鴻盧館[17]にて唐人、人相を見奉りて、源の氏を給はることあり。此時花[18]、白花にかぎる也。又、葵の上と御祝言の時は必、紫色の花を生へし。歌[19]によれり。以上、桐壺一巻のうち考証かくの如し。

一　桐壺（祝儀）桐壺の御帝。桐、芒、紫の花。

【訳】桐壺は宮中にある御殿の名前である。光君の母上は、この殿舎にいらっしゃったことによって、桐壺の更衣とお名づけした。この更衣の御身に若宮が安らかに誕生されて、玉のような皇子を出産される。（この子を）光君（光源氏）と言うのである。（光源氏は）まもなく十二歳の時、元服なされる。その儀式は盛大で、葵の上と結婚される。（光源氏の）父上を桐壺の帝と申すのである。

幼い（光源氏の）元服の組み紐に、行く末長い夫婦仲を約束する思いは結びこめましたか。

師伝によると、これは桐壺という巻名によって、桐を生けるのである。桐（に住む）鳳凰は、名君の時代でなければ（この世に）出現しない、位のある鳥である。御簾の花は、第一の習いとする。祝儀に用いるがよい。

愚案によると、桐壺の更衣に手車の宣旨ということがある。小車という草が、ゆかりがある。また、三位の位を（桐壺の更衣に帝が）お贈りになられる。これは桐壺の更衣が、永久にこの世を去られるときのことである。仏に供える花と心得るがよい。また、桐壺の帝が（更衣の）母である奥方に、光源氏が幼い皇子でおられるとき、靫負の命婦を使者として贈られた和歌、

宮中を吹き渡り（葉や草に）露を結ぶ風の音を聞くと、宮城野の小萩を、そして我が子のことを思いやることです。

というときは必ず、萩を活けるのである。また、源氏が七歳の時、学問始めといって、初めて漢籍の読み方を習う儀式がある。（光源氏は）音楽を演奏しても宮中に響き渡る（ほど、何事にも秀でている）と（物語に）ある。このときは必ず、松を主として活けるのである。松は琴に似通う（からである）。以下もこれに倣え。また、鴻盧館で、異国の人が（光源氏の）人相を拝見して、源の氏姓を授けることがある。このときの花は、白い花に限るのである。また、葵の上とご婚礼のときは必ず、紫色の花を活けるのがよい。それは和歌に基づいている。以上、桐壺の巻、一巻のうち、考証はこのようである。

【注】1「桐つほといふ巻の事、大内に有、御殿の名なり」（『小鏡』）　2「此桐つほに、光けんしの御母さふらはせ給ふ。扨こそ、きりつほのかうゐと申けれ」（『小鏡』）　3「此かういの御腹に、わかみや、ひとゝころ、いてきさせ給ふ」（『小鏡』）　4「やす〳〵と御誕生、玉のやうなる御若宮にて、光る君ト申にて、ほとなく十二才の御元服も過て、葵の上と御婚礼ありしとの御事にて候」（『龍野』）　5「桐つほの御門と、けんしの父御門を申」（『小鏡』）　6巻名歌。光源氏が元服したとき父の桐壺帝が、光源氏の妻になる葵の上の父に対して、娘を光源氏と結婚させる意思が

あるかと尋ねた和歌。「初元結（はつもとゆひ）」は元服の時、初めて髪を結ぶのに用いる紫の組み紐。「世（よ）」は夫婦仲。　7「是は、桐壺と云名にて、桐を生るなり」（『龍野』）　8「桐に鳳凰と申て、聖代の御代ならては出ぬもの也。位鳥也」（『龍野』）　9「御簾（御簾）の花なり。みすの花を略して、当世、かべにうつして、絵に書て、桐の間と申なり。（中略）みすの花、第一の習とする也。委は極意の巻ニ有之。委ニ略ス。極祝義（ママ）なり」（『龍野』）　10「てくるまのせんし（宣旨）」（『小鏡』）「手車」は牛車に対して、人が手で引く乗り物。内裏の中は歩くのが普通であるが、皇族・貴族・高僧などで「宣旨」（天皇の許可）が出された者は手車に乗って通行した。更衣の身分で手車に乗れるのは異例。これは重病の桐壺の更衣を気遣った、帝の特別な配慮による。　11小車という名は、咲きそろった花が車輪に似ていることによる。茎は直立し、その頂上に夏から秋にかけて、菊に似た黄色の花が咲く。　12「三位（さんみ）のくらゐを、をくらせ給ふ」（『小鏡』）桐壺の更衣は身分が低かったが、死後に帝から三位という高い位を与えられた。これも「手車の宣旨」と同じで、破格の待遇。　13「内（うち）より、かの御さとへゆけい（叡負）のみやうふ（命婦）といふ女房（ねうはう）を、御つかひにつかはせ給ふ。（中略）御門（みかど）よりの御ふみに、かうゐの母のもとへ若宮の御ことをよみ給ひ候御歌」（『小鏡』）　14桐壺の帝が、我が子の光源氏を小萩にたとえた和歌。小萩の「小」に「子」を掛ける。「宮城野（みやぎの）」は歌枕で、宮城県仙台市にあった野原、萩の名所。ここでは父帝がいる宮殿である「宮」を掛ける。また「露」は涙を暗示する。　15「源氏（げんし）、七の御としより、御文はじめ（始め）あり。かくもんし（学問）給ふに、こと（琴）、ふゑ（笛）のねにも、雲井（くもゐ）をひゝかす」（『小鏡』）　16たとえば斎宮女御が詠んだ名歌「琴の音（ね）に峰の松風かよふなりいづれのをより調べそめけむ」（和漢朗詠集・下・管絃・四六九）のように、琴の音色と松風の音が似通うという考えがある。　17「かうらい（高麗）より、はかせ（博士）わたりたるに、此宮（みや）をさうせ（相）らる。（中略）ひかるきみとつけたてまつりしより、此けんし（ひかるけんし）を光源氏といふなり。（中略）かのはかせ、あひしところ、こうろくはん（鴻臚館）

なり」（『小鏡』）。この記述によると、まるで外国の博士が源の氏を与えたかのように解釈できる。しかし『小鏡』の別の個所には、「けんしのきみ十二にてけんふく、其日、みなもとの氏を給はりて、たゝ人となり給ひ、いはゆるひかるけんし是なり」とあり、その方が物語の内容（帝から源の姓を賜わる）に合う。　18「白花」は源氏が白旗、平氏が赤旗によるか。　19注6の和歌を指す。紫色の花を活けるのは、『小鏡』の「『はつもとゆいのこきむらさき』といふ事は、宮なとの御子けんふくのおり、こむらさきといふ糸のひらくみにて、もとゆいをとる事、それによせたる事なり」という解説による。

（岩坪健）

二　箒木

箒木とは此源氏一部の惣計、非有非空のことを書て、夢の浮橋にて終る作者の趣意也。さて此巻に雨夜の物かたりといふことあり。源氏君、御物いみにて大内のとのゐ所おはします時、御つれ〳〵のなくさめに品さだめ有し中に、指食の女、こがらしのあだ人、又、伊予介か妻空蟬のつれなかりしこともあり。

数ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらて消る箒木

箒木

御伝曰、是は低く指花を高く、又高く指花を下にさして、身本の方うしろ向やうにさす也。花の心にも、我は上へ立花なれとも、つれなき心、第一に活る也。又、三品五品の草花を活るは、品定といふによれり。又、箒草を生ること、巻の名によれりと知べし。

愚按曰、此巻あま夜物がたりと云。源氏、御物いみにて大内とのゐ所におはします、御つれ〳〵に、頭中将、

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

うまのかみ、とう式部といひし天上人参りて、くまなき御物語あり。梅を生る事、とう式部の物語、文はかせのむすめの事、梅を好文木といふより、是に准ふ。又、なでしこを生るは頭中将の物語也。[14]又、菊を活る事、うまのかみの物語也。菊の宿といふ事有。ウマノカミノモノカタリニ車に和琴 笛とあはする事あり。是は至極あだなる花よし。菊と紅葉といくる事、定りなり。

[15]ことのねも月もえならぬ宿なからつれなき人をひきやとめける

といふ歌あり。あたなる女の家に菊、紅葉あれは也。[16]

【訳】箒木とはこの『源氏物語』全巻すべてに、有りでも無しでもないことを書いて、夢の浮橋で（物語を）終える作者の趣向である。さて、この巻に雨夜の物語ということがある。源氏の君が帝の物忌により宮中の私室におられる時、御無聊の慰めとして（女性の）品定めがあった中に、指食いの女、木枯しの浮気な女、また伊予介の妻である空蝉が薄情だった話もある。

取るに足りないみすぼらしい家の生まれと言われるのが辛いので、あるのかないのか分からぬように姿が消える箒木（のような私）です。

師伝によると、これは（本来）低く挿す花を高く、また、（本来）高く挿す花を下に挿して、貴人に対して（花が）後ろを向くように挿すのである。花の心としても、私は上に向かって立つ花であるけれども、薄情な心を第一にして活けるのである。また、三種類・五種類の草花を活けるのは、（雨夜の）品定めというのに拠っている。また、箒草を活けるのは、巻の名に拠っていると理解しなさい。

愚案によると、この巻は雨夜物語という。光源氏が、帝の物忌により宮中の私室におられる、（その）御退屈さの

ために、頭中将、馬頭、藤式部といった殿上人が参上して、明け広げなお話がある。梅を活けることは、藤式部が語った話に、漢文博士の娘の事（があり）、梅を好文木というので、これに准える。また、撫子を活けるのは頭中将の話（によるの）である。また、菊を活けるのは馬頭の話（によるの）である。菊の宿という事がある。馬頭の話に、牛車（ぎっしゃ）に和琴と笛を合奏することがある。これは極めて、はかない花がよい。菊と紅葉とを活ける事は慣例である。

和琴の音も月も、えも言われぬ素晴らしいお宅であるが、薄情な人を引き留めましたか。

という和歌がある。（菊と紅葉とを活けるのは）浮気な女の家に菊、紅葉があるからである。

【注】1「非有非空」は仏語で、万物の実相は、実在するもの（有）でも、有無を超越した空でもないとする観念。『源氏物語湖月抄』にも帚木の巻に、「天台四門（シモン）の中にては、非有非空（ヒウヒクウ）、亦有亦空（ヤクウヤククウ）、此物語に当たれり」とある。　2「此巻（このまき）に、あま（雨）夜物かたりといふ事は」（『小鏡』）　3「けんし（源氏）の君（きみ）、御物いみにて御かたたかへ（方違へ）に、大内のとのゐ（宿直所）ところにおはします。御つれ〳〵のなくさめにや」（『小鏡』）　4「指喰の女、木からし（枯）のあた人なと、またはいよ（伊予）の介か妻、空蝉か、つれなかりしに」（『六帖』）　5巻名歌。「雨夜の品定め」の翌日、空蝉の寝所に忍び込んだ光源氏は、空蝉と契りを結び、慎ましく思慮深い空蝉に心引かれるが、身分の違いから空蝉は源氏を拒む。当歌は、源氏の和歌「帚木の心を知らで園原（そのはら）の道にあやなくまどひぬるかな」（帚木のように近づくと消えてしまうあなたの心も知らずに近づこうとして、わけもわからず園原の道に迷ってしまったことよ）を受け、源氏への思いを抱きながらも、身分の違いから源氏を拒絶した和歌。帚木は信濃国（長野県）園原の伏屋にあった木。その梢は帚のようで、遠くから見ると見え、近寄ると見えなくなるという。　6「是は、ひきく（低）指花を高く、高くさす花をはひく（低）根もとにさして、身木（ママ）

の方へ花のうしろむくやうにさすなり」（『六帖』）　7「花の心にも、我は上へ立花なれとと、つれなくかこちたるの心もち、第一と生るなり」（『六帖』）　8「時節の花、三色、五色か生る也。これ女の上になか・下の品さだめ、ありしとの心なり」（『六帖』）雨夜の品定めでは、女性を身分により上の品・中の品・下の品に分けた。　9「又、ほうき草をも生る也」（『六帖』）　10注2参照。　11「御つれ〳〵のなくさめにや、其ころとうの中将と聞えしは、源氏の御こしうと、あふひの上の御あになり。かの君とむまのかみ、とう式部といひし天上人参りて、くまなきすき物ともなれは、物かたり申つゐてに」（『小鏡』）　12「文はかせのむすめとうしきふ物かたり」（『小鏡』）。「文はかせのむすめ」は藤式部の話に登場する漢詩文の博士の娘で、この娘も漢文に堪能であった。「好文木」は、晋の武帝が学問に励んでいる時は梅の花が開き、怠った時は萎れていたという中国の故事に由来する梅の古名。　13「なてしことうの中将の物かたり」（『小鏡』）頭中将の話によると、彼の恋人であつた夕顔から、撫子の花に付けて手紙が送られた。その和歌の中で、自分の娘を撫子に喩えて詠んだことによる。この夕顔の娘が玉鬘で、『小鏡』においても、「物かたりに「なてしこ」といふ事あらは、玉かつらと心得へし」とされる。　14「きくのやとむまのかみ物かたり」（『小鏡』）。馬頭の話に登場する浮気な女の家には、菊と紅葉が植わっていた。その女には馬頭のほか、密かに情を交わす男がいた。ある夜、その男は馬頭と同車して女の家に行き、笛を演奏すると、女も和琴をかき鳴らして応えた。　15当歌は、男が女に、「庭の紅葉こそ踏み分けたる跡もなけれ」（庭の落ちている紅葉には、誰かが踏み分けてきた跡もありませんね）などと言いながら、菊を折り取って詠んだ歌である。皮肉を交えながら女を誘った和歌で、この場面を目にした馬頭は、その女の元に通うことを止めた。　16「このやとに、きくもみちなと、ありけるに」（『小鏡』）

（橋谷真広）

三　空蟬

空蟬とは伊予の介か家のやり水、おもしろしとて、かれがもとへ光君心ならず、小君の車にのりて、御しのひ給けるに、うつせみは軒ばの荻といひし妹と素碁うち居給ひしが、さよ更て、空蟬の所に行給ひしに、軒ばのをぎと身をかへて御衣のみ蟬のもぬけのごとく、のこし置給ひしを、とりてかへり給ふ。そのあした御文あり。

空蟬の身をかへてける木のもとになを人からのなつかしき哉

空蟬

御伝、曰、みきに添て、裏の方少し遠く離して指べし。花根本は、縁のきれぬやうニ指べし。是は源氏のかくれ忍給ふ御姿也。又、牡丹、杜若、梅もとき、万年青なと、「身を替てける」といふ歌によりて也。牡丹は軒ばの荻のふくよかなるに准ふ。杜若は本花はしぼみて、莟のかわりニ花咲を、空蟬の君の身を替給ふニたとふ。梅もどき、万年青は皆、実と身と訓かよふより活る也。

愚按ニ曰、車の器、草名、皆よせあり。荻を活るもよし。白花を活るも水を黒とみて、空蟬と軒ばの荻と碁を囲所とす。此巻は皆、夏の事也。庭のやり水などあれば広口よし。

三　空蟬　ゆけいのめうふ。牡丹、杜若、梅もとき、万年青。

【訳】空蟬（の巻の内容）とは、伊予介の家の遣水が風流であるというので、その家へ光源氏が本意ではないものの、小君の車に乗って、お忍びで行かれたところ、空蟬は軒端の荻といった妹と碁を打っていらっしゃったが、夜が更けて、（光源氏が）空蟬のいる所に行かれたところ、（空蟬は）軒端の荻を身代わりに、御衣だけを蟬の抜け殻のように残して置かれたのを、（光源氏は）手に取ってお帰りになる。その翌朝、お手紙がある。

蝉が身代わりに抜け殻を残して去っていった後の木の下で、やはりあなたの人柄が懐かしく思われるなあ。

師伝によると、（花を）中心の木に添えて、裏の方へ少し遠く離して指すのがよい。花の根元は（中心の木と）離さないように挿すのがよい。これは源氏が隠れて人目を忍ばれるお姿である。また、牡丹、杜若、梅もどき、万年青など（を活けるの）は、「身をかへてける」という和歌に基づいているのである。牡丹は、軒端の荻がふっくらしている様子になぞらえる。杜若は元の花はしぼんで、つぼみが代わりに咲くのを、空蝉の君が（軒端の荻を）身代わりにされるのに例える。梅もどき、万年青はすべて「実」と「身」の訓読みが同じだから活けるのである。

愚案によると、車の器、草の名前はすべて、ゆかりがある。荻を活けるのもよい。白花を活けるのも、水を黒（の碁石）に見立てて、空蝉と軒端の荻が碁を囲んでいる所とする。この巻はすべて、夏の出来事である。（物語中に）庭の遣水などがあるので、口が広い花活けもよい。

【注】1「いよのすけか女を御らんして、あかすわすれぬことにおほしめして、かの家のやりみつ、おもしろしとて、にはかに又、かれかもとへおはします」（『小鏡』）ただし物語では、光源氏が空蝉を訪ねるのは伊予介ではなく、その息子の紀伊守の邸宅である。　2「光る君、心ならす小君の車にめして、御しのひたまひけるに」（『龍野』）。光源氏は通常であれば身分の低い小君の車に乗るようなことはあり得ず、その葛藤を示すのが「心ならず」である。物語では光源氏は空蝉と会った後、庭の遣水を口実に再び訪れるが、空蝉は隠れてしまう。そこで後日、小君の車に乗り、人目を忍んで尋ねた。　3「空蝉は、軒端の荻といゝし妹と素碁、打居候ひしか」（『龍野』）物語では軒端の荻は、空蝉の継娘である。　4「せみのもぬけのことく、きぬはかり残したり」（『小鏡』）　5「とりてかへり給ふ」（『小鏡』）　6「そのあしたの御ふみあり」（『小鏡』）　7巻名歌。当歌は衣一枚を残して逃げ去った空蝉へ、光源氏が

自分の思いを託したもの。　8「身木（幹カ）にすねし木ものをして、色よき花をうらの方へさして見へ、少し遠くはなして指へし」（『龍野』）　9「尤、根元は縁の切れぬ様ニさすへし」（『龍野』）　10「此心は、かくれ忍ふの心なり」（『龍野』）中心の木は光源氏、その裏に挿す花は空蟬に見立てる。花の根本は木と接しているが、花弁は木と離れているのは、二人の仲を暗示する。　11梅もどきも万年青も、晩秋に赤くて小さい実が集まってつく。　12「これらは、みな夏の事なり」（『小鏡』）　13「広口」は口の広い花活けのこと。現在では水盤とも言う。　14「ゆけいのめうふ（靫負）（命婦）」（『龍野』）。「靫負の命婦」とは父か兄、または夫が靫負司の官人である女官のこと。『源氏物語』では桐壺の巻で帝の使者を務めるが、空蟬の巻では現われない。以下の巻々でも、その巻に登場しない人の名が記され、すべて『龍野』『六帖』と共通する。

（嶋中佳輝）

四　夕顔

1六条のみやすん所の方江御通ひ給ひし道にて、ゆふかほの咲てあるを御覧して、御車をたてさせ給ひて、「是は何の花ぞ」と尋させ給ふに、ふせやより女のしろき扇に歌をかきて添て参らせ、それより浅からす御契ありし。長生殿のはねをかはし、枝をならべし、みろくの世をねかひ給ひしにや。

8よりてこそそれかともみめ黄昏にほの〳〵みゆる花のゆふかほ

夕顔

御伝9曰、是ハ時の珍花を、み木として、後より夕貌に准へて、昼かほか、又は瓜の類、白花、尤よし。すへて蔓類、白花なれは、巻の意にかなふ也。檜扇を活る事、「白き扇に歌を書て」といふによせあり、と心得へし。

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

愚按、小車[10]花、又、射干[11]、是等の花は必、夕顔の巻になくては、えあらぬ花也。又、みたけぞうしに[12]、みろくしそんとおがむを聞て、長生殿の羽をかはし、枝をならぶる契もひきかへて、みろくの世をねがひて五十六億七千万歳とおぼしめしけるにや。

[13]うばそくかをこなふ道をしるべにてこんよもふかきちぎりたがふな

此歌て相生松生ること、よせあり。又、[14]長生草、万年青[15]なと生るは、「不老門[16]前日月遅。長生殿裏春秋冨」と云句によりたる也。又、水草[17]にうもるゝ。又、鶏頭[18]とりのから。菖蒲[19]御太刀をぬきてと云。詞あやめ太刀に准ふ。紅花[20]くれなゐの御そのまゝきたり。しおもかけいかならんと云詞。

以上皆、夕貌巻中の景物也。

四　夕顔　藤壺の君。時の珍花、夕貌、昼貞、瓜の類。

【訳】（光源氏が）六条の御息所の方へお通いなさった道で、夕顔が咲いているのを御覧になって、御車をお止めなさって、「これは何の花だ」とお尋ねになると、粗末な家から女が白い扇に和歌を書いて（花に）添えて差し上げ、それ以来（夕顔との）浅くはない逢瀬があった。長生殿で羽根をかわし、枝をならべ（た誓いは不吉なので）、弥勒の世（ほどの遠い未来）を（光源氏は）お願いなさったのだろうか。

もっと近くに寄って、はっきりとお目にかかろうと思う。夕暮れ時にぼんやりと見た花の夕顔（のようなあなた）を。

師伝によると、これは、その時の珍しい花を中心として、その後ろから夕顔になぞらえて、昼顔か、または瓜の類で白い花（を活けるの）が最もよい。すべて蔓類の白い花であれば、この巻の趣旨に叶うのである。檜扇を活けることは、「白い扇に和歌を書いて（光源氏に差し上げた）」ということに言われがある、と心得なさい。

愚案によると、小車の花、または射干などの花は必ず、夕顔の巻になくてはならない花である。また、御岳精進（のため）に「弥勒慈尊」と拝むのを（光源氏は）聞いて、「長生殿の羽を交わして、枝を並べる」という誓いは止めて代わりに、弥勒の世を願って五十六億七千万年（の遠い未来を約束しよう）とお思いになったのだろうか。

優婆塞（うばそく）がお勤めをしている仏の道に導かれて、来世までの深い約束に背かないでください。

この歌により、相生の松を活けることには言われがある。また長生草、万年青などを活けるのは、「不老門のあたりでは、時はゆっくりと流れて（天子は老いず）、長生殿の中では（前途ある君主は）若い」という句によるのである。また水草には、「水草に埋もれる池」という言葉がある。また鶏頭は、「鳥のしわがれた鳴き声」という言葉（による）。菖蒲は、「御太刀を抜いて」という言葉（により）、菖蒲は太刀になぞらえる。紅花は、「紅のお召し物をそのまま着ていた面影は、どのようであろうか」という言葉（によって活ける）。以上はみな、夕顔の巻の中の風物である。

【注】1「六条のみやす所の方へ御通ひの道に」（『龍野』）　2「夕顔の咲乱しを御覧にて」（『龍野』）夕顔は夏の夕方、朝顔に似た白い花が咲いて翌朝しぼむ。　3「御車をたてゝ」（『小鏡』）「御車とゞめさせたまひ候へは」（『龍野』）　4「なにの花そと尋させ給ふに」（『小鏡』）　5「ふせやより、女の、白き扇に歌を書て、花をそへまいらせ候より」（『龍野』）　6「あさからす御契ありし」（『龍野』）　7注12を参照。　8巻名歌。扇に書き添えられた贈歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」（当て推量にあのお方かしらと見当をつけております。白露の美しさで、こちらの夕顔の花もいっそう美しくなります）への返歌。　9「時節の珍花を身木にして、後よりまへゝ、夕かほか瓜の類、尤白き花、よし」（『龍野』）珍しい花は光源氏をかたどる。　10小車は、1桐壺の巻の注11を参照。　11「非扇（檜扇）を応答へし」（『龍野』）射干（やかん）は檜扇の漢名。その実は黒くて丸く、「ぬばたま」と呼ぶ。　12「みたけさうし

に、みろくしそん（弥勒慈尊）とおかむを、きかせ給ひて、ちやうせい（長生）殿のはねをかはし、えゝ（えたカ）をならへしちきりもひきかへて、みろくの世をねかひて、五十六をく七千万歳とおほしめしけるにや」（『小鏡』）白楽天「長恨歌」の一節、「七月七日長生殿、夜半人無く私語の時、天に在りては願はくは比翼の鳥と作り、地に在りては願はくは連理の枝と為らむと」（七月七日のこと、長生殿で夜も更けて侍臣も傍らになく、ただ二人ひそやかに語ったとき、「二人は天上に生まれるなら、比翼の鳥となろう。地上に生まれては、連理の枝となろう」と誓い合った。）を踏まえる。玄宗皇帝と楊貴妃は七夕の夜、長生殿で永遠の愛を誓い合ったが、安禄山の乱が起こり、楊貴妃は馬嵬駅で殺されたので、この誓いは不吉とする。また弥勒は、仏より先に入滅して兜率天（とそつてん）の内院に生まれ、五十六億七千万年を経てから人間に生まれ、衆生を教化すると信じられた。「御岳精進（みたけさうじ）」は御岳（吉野の金峯山）に参籠する前に、千日間の精進潔斎をすること。13「優婆塞（うばそく）」は在俗のまま仏門に帰依する男子。ここでは御岳精進をする男。その男のお勤めをしている声を聞いた光源氏が、夕顔との契りは来世まで永遠に結ばれると詠んだ歌。14長生草は長生蘭の総称。寛政六年（一七九四年）に刊行された『長生草』には、種々の品種が絵入りで紹介されている。15万年青は、3空蝉の巻の注11を参照。16この漢詩は『和漢朗詠集』下、祝、七七三番に収める。不老門は洛陽にあった、漢代の宮門の名。長生殿は唐代の離宮にある宮殿の名で、玄宗皇帝と楊貴妃がよく訪れた（注12参照）。「春秋に富む」は年が若く、これから先の人生が長いことをいう。17「水くさにむもるゝ池」（『小鏡』）光源氏が夕顔を連れ出した廃院の池。物語には「池も水草（みくさ）に埋（うづ）もれ」とある。水草を活けるのは、その様を表わす。18「とりのからこゑ」（『小鏡』）鶏頭を活けるのは、その漢字表記による。ただし物語では、夜中に夕顔が物の怪に取りつかれて亡くなったあと、「鳥のから声」が聞こえ、光源氏は梟の声かと思ったとあり、鶏ではない。19「御太刀をぬきて持給ふ」（『小鏡』）夕顔と共寝し

た宵に、枕元に女の霊が現われ、はっと目覚めた光源氏が太刀を引き抜く場面。太刀は魔物を追い払う力がある、と信じられていた。菖蒲は葉が剣の形に似ていて、端午の節句に飾る太刀を「菖蒲太刀」という。20「わかくれなゐの御そのま丶きたりし面影」（『小鏡』）夕顔の亡骸に光源氏は自分の紅の衣を着せかけ、そのまま寺に運んだ。

（溝口利奈）

五　若紫

1此巻、若紫といふ事。2紫の上は藤つほの后の御めいなり。3おさなかりし時より、懸想し給ひし也。4あまりおもしろく、此巻つくりたりとて、式部を紫式部となつけ給ひしほどの事也。5北山の僧都のもとへ、わらは病、呪の事たのみに参給ひし時、6うば君の方にて見そめ給ひ、7紫の上のかひ給ひし雀の子を、いぬきといひし童がにがしたるを、むつがり給ひし事なとあり。

8手につみていつしかもみん紫のねにかよひける野への若草

若紫

御伝9曰、10立のびたる竹を生、11中段に白か黄の花を活、12其下に紫の花を活へし。13是は少しうつむくやうにさす事、習あり。14上の笹は、15いぬきか取にがしたる雀に准ふ。16中段の花は北山のひじりの衣の色にたとふ。17下は若紫の雀ををしみて、むつがり給ふにかたどる也と心得へし。

愚按18曰、19藤を活るもよし。20若紫は藤壺の御めいにあたれば也。21又、松のとぼそといふ詞によりて瀧と22柳、糸桜によりて瀧の音といふ詞みる。23又、藤、桜、共活藤さくらにつくるつぼといふ詞。24又、艸草、数品活草ムシロト。云詞あり。25以上、若紫巻中の景物也。

五　若紫（恋）。竹、白黄ノ花　紫ノ花（藤）。朱雀院。

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

【訳】この巻を若紫ということ。紫の上は藤壺の后の姪御様である。（光源氏は）幼少のときから、（藤壺を）恋慕されたのである。あまりに面白くこの巻をつくったということで、（作者の）式部を紫式部とお名付けになったほどのことである。北山の僧都のもとへ、（光源氏が）瘧の加持祈祷のことを頼みに参られたとき、（紫の上をその）祖母君のところでお見初めになり、紫の上が飼われていた雀の子を、犬君といった（召使の）童が逃がしてしまったので、（紫の上が）機嫌を悪くされたことなどが（書かれて）ある。

手に摘んで早く見たいものだ。紫草の根に通じた野辺の若草を。

師伝によると、立ち伸びた竹を活け、中段に白色か黄色の花を活け、その下に紫色の花を活けるがよい。これ（紫色の花）は、少し俯くように挿すことの決まりがある。上段の笹は、犬君が取り逃がした雀に擬す。中段の花は、北山の聖の衣の色にたとえる。下段は、若紫（紫の上）が雀を惜しんで機嫌を悪くされることに似せるのである、と心得るがよい。

愚案によると、藤を活けるのもよい。若紫は藤壺の姪御様にあたるからである。また、松は「松のとぼそ」という言葉によって（活ける）。また、糸柳や糸桜は「瀧の音」という言葉によって、瀧に見立てる。また、藤も桜も一緒に活けるのは、「藤と桜を付けた壺」という言葉（による）。また、草花を種々に活けるのは、「草筵」という言葉がある（ことによる）。以上が、若紫の巻中にある風物である。

【注】1「この巻わかむらさきといふ事」（『小鏡』）　2「此むらさきのうへは、せんてひの御この兵部卿のみやの御むすめ、藤つほのきさきには御めいなり」（『小鏡』）　3「まゝはゝの藤つほの宮を、おさなくより心にかけて」（『小鏡』）亡き桐壺更衣に生き写しの藤壺が入内すると、光源氏は亡母の面影を求めて恋い慕う。　4「ことさら此巻、

おもしろく作りたりとてこそ、式部の君は、むらさきしきふとは付させ給へり」（『小鏡』）　5この本文では、瘧を直す加持祈祷を受けるために「北山の僧都」（紫の上の祖母の兄）を訪ねたと解釈できる。けれども『小鏡』に、「わらはやみをして、北山にたうときひしり有とて、めしけれとも、京へは出ぬ事にて参らす。さらはとて北山へおはします」とある通り、『源氏物語』では聖（大徳）を訪ねる。光源氏が北山へ赴いたのは、聖は年老いて外出できないため。なお、聖の庵の近くに、北山の僧都も住んでいた。　6「このうは君、心なやみ給ふ程に、祈りなとせんとて、この山におはしましけるに、姫きみをも、つれておはしましたるを、のそきて御覧しはしめさせ給ふ」（『小鏡』）「うば君」は紫の上の祖母で、僧都の妹。夫を亡くしてから尼になったものの病みわずらい、快方に向かうまで僧都のもとで紫の上を育てる。紫の上の母はすでに亡くなっている。　7「むらさきのうへ、すゝめの子をかひ給ひしを、いぬきといひしわらは、にかしたりしを、むらさきの上、いたくおしみて、なき給ひし御すかたの」（『小鏡』）犬君は召使の女童の名前。　8巻名歌。藤壺の姪である紫の上を手元に引き取りたいという、光源氏の和歌。「紫」は紫草で、夏に白色の小花をつけ、根は紫色の重要な染料となる。この色の連想から花が紫色の藤、すなわち藤壺を暗示する。「根に通ひける」は血縁関係を表わし、「若草」は紫の上を指す。「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今和歌集・雑上・八六七・よみ人しらず）などを念頭に置く。　9「たちのひたる物を一もと生て」（『龍野』）　10「中段に白か黄かの花を一色さして」（『龍野』）　11「その下に、赤か紫かの色よき花を一色」（『龍野』）　12「少しうつむくやうに生へし」（『龍野』）　13「立のひたる笹は、鳥にかたとる」（『龍野』）　14「中段の花は、僧にかたとる」（『龍野』）　15「下の色よき花は、紫の上むつかるていなり」（『龍野』）　16藤は蔓性落葉樹で、花期（四～五月頃）には薄紫色（藤色）の長い花房を滝のように垂らす。　17「此紫の上は、此藤つほには御めいにておはしませ

は」（『小鏡』）18「まつのとほそ」（『小鏡』）光源氏が帰京する折の、聖の和歌「奥山の松のとぼそをまれに開けてまだ見ぬ花の顔を見るかな」による。「とぼそ」は戸や扉をいう。老年により外出できなかった聖が庵を出て、「まだ見ぬ花」のような光源氏を見て賞賛する。19「たきのをと」（『小鏡』）明け方に御堂で法華経を誦読する声が風にのって聞こえ、実に尊く滝の音に響き合い、光源氏が詠んだ和歌「吹き迷ふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな」による。「夢」に煩悩の意をも含め、紫の上への執心が浄化される思いを詠む。「柳」「糸桜」は『小鏡』に記されていないが、その長く垂れた枝が滝を表わすか。20「藤さくらにつくるつほ」（『小鏡』）光源氏帰京の折、薬を入れた紺碧の宝石壺を藤や桜などの枝につけて、僧都が献上した。薬師瑠璃光如来の左手に持つ薬壺にちなむ趣向。21「ソウクハ」は「草花」か。22『源氏物語』には「草の御むしろ」（二一〇頁）、『小鏡』には「くさむしろ」（草を敷物とする意で、転じて旅先での粗末な敷物や寝床をいう）とある。光源氏を迎えた僧都が、自室を謙遜して言った言葉。

（丹羽雄一）

六　末摘花　紅花コト

1 此巻の心は常陸君と申古き宮おはしましき。2 うせ給し御あとに姫君ひとり、のこりておはしき。3 いとかすかなるおんすまゐにて、ながめすごし給ひけり。4 源氏君、聞つたへさせ、ゆかしくおぼしめして、5 御めのと少将の命婦、道しるべして、みせたてまつり給へり。6 かの女、色しろく、鼻高く、さきあかく、ざうの如くおはしけるを、紅花にたとへ給ひし也。7 なつかしき色ともなしになにゝこの末つむ花を袖にふれけん

末摘花

御伝曰、是形[8]は真木に赤色の花を旨とさすべし。下[9]の方に何にても、外色の草花をさす也。物語[10]の意にかなふと心得べし。

愚按曰、末摘花[11]は呉藍といふ。クレノアイ[12]也。それをクレナヰとは云也。紅花といふ、是也。日本古名は「ヒカゲノアイ」といふ也。日蔭藍と書也。しかれとも、紅花は活華に趣好しからねば、末赤き花を赤花とて紅花になそらふ也。何の花にても、紅のとれ侍るを以しるへし。又、蔓類を活る事、習あり。象の鼻にたとふ。また、葉がくれの椿[13]、葉かくれの牡丹、芍薬、又、蓮なとを活る。いつれも白花[14]よし。是を月にたとへたり。又、春のいざよひ[15]と云事あり。是も月に縁あり。頭中将歌、

もろ[16]ともに大内山はいてつれといるかたみせぬいさよひの月

以上、末摘花の巻中の心得、景物也。

六　末摘花。光る源氏。赤き花、椿、牡丹、芍薬、蓮。

【訳】この巻の主題は、常陸の宮と申す古い皇族がいらっしゃった。お亡くなりになった後に姫君が一人、残っていらっしゃった。ひどくみすぼらしいお住まいで、物思いに耽ってお過ごしになっていた。光源氏は人づてにお聞きになり、会いたく思われて、ご自分の乳母である少将の命婦が案内をして、会わせてさしあげなさった。その女君は色白で、鼻は高く、（鼻の）先は赤く、象（の鼻）のようでいらっしゃったのを、紅花に譬えなさったのである。

魅力的な色でもないのに、どうしてこの末摘花（紅花）に袖を触れてしまったのであろう。（どうしてこのような女と、契りを結んだのだろう。）

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

師伝によると、この形式は中心となる植物として、赤色の花を主として活けるのがよい。下の方には何でも、他の色の草花を活けるのである。物語の趣旨に当てはまると心得るがよい。

愚案によると、末摘花は呉藍という。（訓読すると）クレノアイである。それをクレナイというのである。紅花というのは、これである。日本での古名は「ヒカゲノアイ」というのである。「日蔭の藍」と書くのである。しかしながら、紅花は活け花（にする）には風情が好ましくないので、先が赤い花を赤花といって紅花になぞらえるのである。何の花でも、紅色がとれますのによって知るがよい。また蔓（つる）の類を活けることは、しきたりがある。（蔓は）象の鼻に譬える。また葉隠れの椿、葉隠れの牡丹、芍薬、また蓮などを活ける。いずれも白花がよい。これらは月に譬えている。また「春の十六夜（いざよい）」ということがある。これも月にゆかりがある。頭中将の歌に、

一緒に宮中を退出したのに、あなた（光源氏）は十六夜の月のように行方をくらましてしまったのだね。

以上が、末摘花の巻の内の心得と風物である。

【注】1「此巻すゑつむ花といふ事。ひたちの君と申ふるき宮おはしましき」（『小鏡』）　2「うせ給し御あとに、姫君一人のこりておはしき」（『小鏡』）　3「いとかすかなる御すまゐにて、なかめすこし給ひけり」（『小鏡』）　4「けんし聞つたへさせ給ふて、ゆかしくおほしめして」（『小鏡』）　5「けんしの御めのと少将のみやうふとて、内にさふらひけるか、此宮にしたしく参りかよふ人なれは、みちしるへして見せたてまつり給へり」（『小鏡』）光源氏に末摘花の噂をして間を取り持ったのは、『源氏物語』では大輔の命婦（帝付きの女房で、母は光源氏の乳母）である。

6「この御かたち、色しろく、はなたかく、さきあかく、ざう（象）のことくにおはしけり」（『小鏡』）　7巻名歌。光源氏は末摘花と契りを結んだ後、彼女の生活を援助するようになる。しかし格別に美人というわけでもないのに、なぜこ

のような女と契りを結んでしまったのだろうか、と思い返して詠んだ和歌。　8「此形は、身木に赤花をおもに指して」（『龍野』）　9「下のあしらいには、何にても余の色の草花をさすへし」（『龍野』）　10「右歌の心によるへし」（『龍野』）「右歌」とは注7の和歌。　11末摘花も呉藍も紅花の異名。末摘花は茎の末に咲く黄色の花を摘み取り、染料の紅を作ることにちなんだ名称。　12クレノアイのノア（noa）がナ（na）に変化してクレナイになった、とする。このように連続する二つの母音のうち一つが脱落する現象を、母音連続の回避という。　13「葉がくれ」は木の葉や草木の陰になって見えないこと。ここでは花が葉に隠れて見えない状態を指す。　14光源氏が末摘花を最初に訪れたのは春で、十六夜の月が雲に隠れている朧月夜であった。白花を月に、葉を雲に見立ててこれを表現する。　15「春のいさよひ」（『小鏡』）注14参照。　16この和歌は『小鏡』に掲載。光源氏が末摘花を初めて訪ねた夜、頭中将が跡をつけてきて、戯れて光源氏に恨み言を述べた歌。

（八木智生）

七　紅葉賀

桐壺の御門の頃、院の御賀をつとめ給ふ。頃は十月の事なれは紅葉をもてなしにて、御賀あり。紅葉の下にて、令人、殿上人、宮たちも、そのきりやうあるは、舞給ふ。源氏君、青海波を舞給ふ。折しも松の嵐に散かふ木葉の中に、かさしの紅葉いとうつり過たるさま、いとおもしろく、皆人感じあへり。おん母藤つほの君も、御覧し給へり。しのびて御文ありし也。

物思ふにたちまふへくもあらぬ身の袖打ふりしこゝろしりきや

紅葉賀

御伝曰、此形は紅葉也。[9] 大葉二三数あしらふへし。[10] 是は舞楽の袖に准ふ。[11] 極意と云は水板の上に落葉五七枚、下座の方にちらして置べし。[12] 掛花ならは、[13] 花入の下通に床畳の少し下、よせ心に集て置也。[14] 是、伝授の事也。[15] しやがを生るも同意也と心得べし。

愚按曰、桐を生るも縁あり。[16] 桐壺の帝の御賀なれば也。[17] 又、菊もよし。「左大将たちて、御前の菊折て、かざし替給ふ」ともあるによれり。[18] 葉蘭を生るも習あり。是は青海波によせあり。[19] 春ならは、楊貴妃といふ桜を生る。

[20] から人の袖ふることはとをけれどたちゐにつけてあはれとはみき

[21] 是はゲイ、シヤウ、ウヰの曲といふ舞にかたとる。[22] 又、撫子、[23] 竹に竹の子、若竹などもよし（親の親といふ。詞によれり）。射干、又、枇杷（此ないし琵琶ひく。と云詞によれり）。以上、紅葉の賀の景物也。

【訳】桐壺の帝の頃、（朱雀）院の御賀を催される。時節は神無月（旧暦十月）のことであるので、紅葉を饗応にして御賀がある。紅葉の下で、楽人や殿上人、宮たちも、（舞楽の）才能がある人は、舞いを披露される。光源氏は、青海波を舞いなさる。ちょうどその折、（楽の音に調和して）松風が吹き乱れ、あちらこちらに散る木の葉の中に、（光源氏の）冠に挿した紅葉がたいそう散り過ぎて（美顔に圧倒されて）いる様子は、たいそう趣深く、すべての人が感動し合った。御母藤壺の君も、御覧になった。（光源氏から藤壺へ）人目を避けて、お手紙があったのである。

物思いのために、立ち舞うことなどできそうもない私が、（あなたのために）袖を打ち振った、この心をご存知でしたか。

師伝によると、この形式は紅葉である。大葉二、三枚を取り合わせるのがよい。これ（大葉）は舞楽の袖になぞらえる。極意というのは、水板の上に落ち葉五、七枚を下手に散らして置くのがよい。掛け花ならば、花入れ（花器）の

下あたりで床畳の少し下に、吹き寄せる風情で集めて置くのである。これは秘伝のことである。シャガを活けるのも同じ趣向であると心得なさい。

愚案によると、桐を活けるのもゆかりがある。桐壺の帝（主催）の御賀であるからだ。また、菊もよい。「左大将が立って、（帝の）御前の菊を折って（光源氏の）かざしの紅葉と挿し替えなさる」とも（物語に）あることによる。葉蘭（または馬蘭草）を活けるのも決まりがある。これは青海波に言われがある。春ならば、楊貴妃という桜を活ける。

唐土（もろこし）の人が袖を振って舞ったという故事には疎いですが、あなたの舞いの一挙一動につけて、しみじみと感慨深く見ました。

これは霓裳羽衣（げいしょうういの）の曲という舞いになぞらえる。また、撫子、竹に竹の子、若竹などもよい。（それは）「親の親」という言葉による。射干（ひおうぎ）、また枇杷は、この典侍（ないしのすけ）が琵琶を弾くという言葉による。以上が、紅葉賀の巻の風物である。

【注】1「桐つほの御門、そのころのゐ（院）むの御か（賀）をつとめ給ふに」（『小鏡』）　2「ころは十月なれは、紅葉をもてなしにて御か（賀）あり」（『小鏡』）御賀を祝う朱雀院への行幸は十月十日すぎのことである。　3「もみちのしたにて、れいしん（令人）あり。てんしやう人、宮たちも、そのきりやう（器量）たるは、まひ給ふ」（『小鏡』）「令人」は音楽を奏する人、「殿上人」は清涼殿の殿上の間に昇殿を許された四位・五位の人、および六位の蔵人。　4「けんしのせいかい（青海波）はをまひ給ふに」（『小鏡』）。青海波は、唐楽に属する雅楽の曲名で、兜を冠して波模様の服を着た二人が海波のさまを模して舞う。　5「折ふし、松の嵐にちりかふ木の葉の中に、かさしのもみち、いと、ちり（散り）過たるさま面白く、みな人、かんし（感じ）

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

まいらせ候」（『六帖』）楽の音に調和する松風は、1桐壺の巻の注16にもある。「かざし」は髪や冠に挿す花や枝、造花で、ここでは紅葉を挿している。　6「御母ふぢつほの君も、御見ぶつ（見物）ありしとの御事にて候」（『六帖』）女御や更衣などは宮中外の催しに参加できなかったため、藤壺が光源氏の青海波を見たのは、朱雀院への行幸に先立って宮中で催された試楽でのことである。『小鏡』では、試楽を行った日と行幸当日が同日のことのように書かれている。7「しのひて御ふみあり」（『小鏡』）　8巻名歌。試楽を催した翌日に光源氏が、自分の舞い姿を藤壺はどのように御覧になったかと思って詠んだ歌。　9「此形は紅葉なり」（『六帖』）　10「大葉、二三枚、生へし」（『六帖』）　11「是、舞楽の舞の袖なり」（『六帖』）大きい葉を舞装束の袖に見立てる。　12「此、極習とするは置花なれは、水板の上に落葉を五七枚、下座の方にあつめて置なり」（『六帖』）「置花」とは、華道において床の間や卓上に飾る花のこと。「水板」は、水指（釜に補給する水や、茶碗・茶筅などをすすぐ水をたくわえておく器）を飾る長板（釜や水指、杓立などをのせる長方形の板）の一種。「下座」は観客から見て舞台の左方、ここでは床の間に向かって左側を指す。13「掛花なれは花入の下辺、床畳の少し下へよせる心にあつめて置也」（『六帖』）「掛花」とは置花に対して、壁や柱などに掛けて飾ること。「床畳」は、床の間や床に敷く畳のこと。　14「これ伝受の事也」（『六帖』）　15「さなき時は、しやかなり」（『六帖』）「しゃが」はアヤメ科の多年草。五月ごろ、中心が黄色い淡紫色の花をつける。　16本文では桐壺帝の御賀となっているが、物語では朱雀院に住む先帝（桐壺帝の父か兄）の御賀である。　17「かさしのもみち、いたくちりすきて、御かほのにほひに、けをさるれは、左大将たちて、御まへのきく折て、かさしかへ給ふ。（中略）さしかゆるきく（菊）。ゆふはへ。あしふみ。かほのにほひ。木たかきもみち」（『小鏡』）かざしの紅葉が散り過ぎてしまい、青海波を舞う美しい光源氏の顔の輝きに紅葉が圧倒されたので、左大将が御前の菊を折って紅葉と挿し替

えたことによる。　18「葉蘭」はユリ科で、早春に紫褐色の花が開く。葉柄は長く、料理の敷物に使われる。「馬蘭」は馬蘭草のことで、ねじあやめの異名。葉がねじれているので、この名がある。ねじあやめはアヤメ科で、春に香りのある淡青紫色の花を開く。「葉蘭」も「馬蘭」も葉は線状で、それを波模様として青海波に見立てたか。　19楊貴妃桜はサトザクラの一品種で、花は大きく淡紅色、八重咲きである。玄宗皇帝に寵愛された楊貴妃の名がついた桜を挙げたことについては、注21参照。　20この和歌は『小鏡』に掲載。青海波を舞う美しい光源氏の姿や顔を見過ごせなかった藤壺から、光源氏（注8の歌）への返歌。「袖ふること」に「袖振ること」と「古事（ふること）」（玄宗皇帝の故事。注21参照）をかける。　21「たう（唐）、やうきひ（楊貴妃）のけいしやうう（霓裳羽衣）ゐのまひを、よそへけるにや」（『小鏡』）霓裳羽衣は、唐の玄宗皇帝が天人の音楽にならって作った曲、または玄宗が月宮殿に遊び、そこで仙女たちが舞い踊る様を見て楽工に作らせたものともいう。　22「なてしこ」（『小鏡』）「撫子」は「撫でし子」の語音から可憐な愛し子を連想させる。藤壺は桐壺帝の男御子を出産するが、その若宮は実父の光源氏に生き写しであった。光源氏と藤壺は、若宮を撫子に喩えた和歌を詠みあう。　23「おやのおや。あふき。ひはのね（琵琶）此ないし、ひわひく（中略）此けん内侍のすけ、ひは上手にて」（『小鏡』）光源氏が、琵琶の名手である年老いた源典侍（げんのないしのすけ）と戯れたとき、年に似合わぬ派手な扇をもっていた。それにちなみアヤメ科の射干（ひおうぎ）を活ける。また「親の親」は祖母を意味し、20朝顔の巻で出家した源典侍が光源氏に、「年ふれどこの契りこそ忘られね親の親とか言ひしひと言」と詠みかけた歌による。「竹に筍」も「竹に若竹」も、親子の取り合わせになる。

（湯本美紀）

八　花の宴

紅葉の賀のつぎのとしの春、大内に花見あり。[1]南殿桜盛に花のもとにて、御遊あり。[2]宮たち、公卿、殿上人、地下にいたる迄、詩をつくり給ふ。その夜、[4]源氏、さりぬへき隙もやと、例の藤つぼのあたりをしのびうかゞひ、たゝずみありき給ふ程に、こうきでんの三の口ニ立給ふ。内より[5]女房のこゑの、なべてのにはあらぬか、「朧月夜ニしく物ぞなき」とうたひけるニいひよりて、扇とりかはし給へり。

[6]いつれそと露のやとりをわかむまに小笹か原に風もこそふけ

花宴

御伝曰、此[7]花形ハ桜也。アシライ、檜扇、シヤガなどよし。射干、鳶尾は、扇にかたとると心得へし。

愚按曰、花之宴ハ紅葉賀の次の年の春なれは、若楓一□は、桜とならぶるもよし。又、藤もよし。「[8]さてその夜、源氏さりぬへき隙もやと、れいの藤つぼのあたりをしのひうかゝひ、たゝつみありき給ふ」とあるによれり。又、柳に桜、柳に白椿など活るもよし。「[9]朧月夜にしく物ぞなき」といふ歌によりて、花を春月に准ふなり。[10]大葉を用もよし。柳花宴、[11]春鶯囀といふ舞にならふ。又、[12]中を明て活るもあり。「三の口明たり」といふ詞によれり。又、草花あまた活るもよし。「[14]くさのはら」といふ詞あり。小竹を活もよし。「[15]小ざゝはら」と詞あり。又、水上の月といふ活方、習あり。広口に[16]花の影うつるやうに活へし。「[17]霞める空の月を水にうつしたり」といふ詞によれり。いつれも巻中の景物なれは心得置て、おもしろきさまを活へし。

八　花乃宴（花見）。惟光。檜扇、鳶尾、藤、柳、桜、白椿、小竹。

【訳】紅葉の賀の翌年の春に、内裏で花見がある。紫宸殿の（左近の）桜が盛んに咲いている花の下で、御遊がある。

親王たち、公卿、殿上人、地下人にいたるまで詩を作られる。その夜、光源氏は（藤壺に）会えそうな機会もあろうかと、例の藤壺のあたりをこっそりと窺い、たたずんだり歩いたりされているうちに、弘徽殿（こきでん）の三つ目の戸口にお立ちになる。（その戸口は開いていて）中から女性の声で、並の身分ではない人が、「朧月夜に及ぶものはない」と歌っていたのに言い寄って、（逢瀬のしるしに）扇を取り交わしなさった。

どこが露の宿る所かと捜し回っている間に、小笹の原に風が吹いて（露が消えて）しまうように、露のようにはかないあなたのお宿はどこかと捜している間に、噂が立って私たちの縁も絶たれてしまうでしょう。（ですから、あなたの身元を教えてください）

師伝によると、この花の中心は桜である。取り合わせは、檜扇、シャガなどがよい。檜扇、シャガは、扇をかたどると心得なさい。

愚案によると、花宴は紅葉の賀の翌年の春なので、一瓶（いっぺい）の若楓は、桜と並べるのもよい。また、藤もよい。「さてその夜、光源氏は藤壺に会える機会もあろうかと、例の藤壺のあたりをこっそりと窺い、たたずんだり歩いたりされている」と（物語に）あるのによる。また柳に桜、柳に白椿などを活けるのもよい。「朧月夜に及ぶものはない」という和歌によって、花を春の月になぞらえるのである。大葉または葉蘭を用いるのもよい。柳花宴と春鶯囀という舞になぞらえる。また、中をあけて活けることもある。「三つ目の戸口が開いている」という（物語の）言葉による。また、草花を数多く活けるのもよい。「草の原」という言葉が（物語に）ある。小竹を活けるのもよい。「小笹原」という言葉が（物語に）ある。また、水上の月という活け方は決まりがある。水盤（の中の水）に花の影が映るように活けるのがよい。「霞んだ空の月を水に映した」という（物語の）言葉による。いずれも巻中の風物で

あるので、心得て趣深い様子を活けるがよい。

【注】1「かの紅葉の賀のつきのとしの春、大内に花見あり」（『小鏡』）　2「南殿の桜さかりに、花のもとにて御あそひあり」（『小鏡』）　3「宮たち、公卿、殿上人、ちけにいたるまで、詩を作り給ふ」（『小鏡』）　4「さてその夜、けんし、さりぬへき隙もやと、れいの藤つほのあたりを、しのひうかゝひ、たゝすみありき給ふ程に、こうき殿の三のくちに立給ふ」（『小鏡』）弘徽殿は清涼殿の北、藤壺（飛香舎）の東隣。「三の口」は北から第三間の戸口。　5「内より、わかき女房のこゑの、なへてのこゑにはあらて、「おほろ月夜に、しくものそなき」と」（『小鏡』）「朧月夜にしくものはなき」とうたかひかけるに、源氏、いゝより給ひて、扇をとりかはし給ひしを」（『龍野』）「照りもせず曇りもはてぬ春の世の朧月夜にしくものぞなき」（照りもしないし、曇りきってもしまわない春の夜のおぼろにかすむ月の美しさにおよぶものはないことだ）（新古今和歌集・春上・五五・大江千里）。この和歌により、後世この女を朧月夜と称する。　6巻名歌。当歌は、光源氏に執拗に名を問われて答えた朧月夜の和歌、「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ」（私がこの世から消えたならば、あなたは私の名を知らないからといって、「草の原」（死後の魂のありか）を尋ねないつもりですか）に対する光源氏の返歌。その「草の原」を受けて、女の住まいを「露のやどり」、その縁により「小笹が原に風」は世間の人の妨害を意味する。「もこそ」は懸念を表わす。　7「此形は桜なり。応答に非扇（檜扇）か、しやか（射干）、あしらふへし。是を、扇の応答といふなり。」（『龍野』）「あふきの事（かたみ）」（『小鏡』）光源氏と朧月夜は、逢瀬のしるしに扇を取り交わした。「あしらい」は華道用語で、よい取り合わせにより、二つの草花が一つに調和することをいう。檜扇については、4夕顔の巻の注11を参照。シャガについては、7紅葉賀の巻の注15を参照。鳶尾（エンビ）はアヤメ科で、葉は短広剣状、初夏に白または紫色の花が咲く。　8注4を参照。　9

注5を参照。　10大葉と葉蘭は7紅葉賀の巻の注10 11 18を参照。　11唐楽「柳花苑」。「とうの中将たちて、りうくわゑん（柳花苑）をまひし（舞）」（『小鏡』）。物語ではその曲名にちなみ、柳を活ける。　12唐楽「春鶯囀」。鶯の声を聞いて感動した唐の高宗が、白明達に作らせた曲と伝える。物語では光る源氏が舞い、舞い人の袖を大葉（注10）で表現する。　13「三の口」は注4を参照。中を開けて活けるとは、花と花の間、あるいは花と花器の間を開けて活ける、ということか。　14「くさのはら」（『小鏡』）注6に引用した朧月夜の和歌による。草原には種々の草花が植わっているので、「草花あまた活くるもよし」とする。　15「をさゝはら」（『小鏡』）注6参照。　16「広口」は、水盤のこと。　17「かすめる空の月を水にうつしたり」（『小鏡』）朧月夜が持っていた扇の意匠。

（溝口利奈）

九　葵

1加茂の葵祭に源氏君、紫の上と同し車にめして御見物有し時、葵の上の車とみやす所の車と、たて所を争ひて、みやす所の車そんじたる御うらみありて、仲秋の頃、物怪となり、葵の上の命とり給ひける事、恐しき物語あり。2また、紫の上の御くしを、源氏そがせ給ふ。賀茂の祭に髪そぎといふは是也。御くしそぎはて、祝の歌、

5はかりなき千尋の底のみるふさのおひゆくすゑは我のみそみん

葵

御伝、曰、6此形、葵、二本同し高さに生、鳶尾をあしらふへし。7シヤガの葉弐枚、出すべし。8車争ひの形也。9さて、時の花、何にても末を同しやうに揃ゆること習あり。10是は、たけ競といひて、11外の花形には嫌ふ事なれども、12此花形斗、習とする也。13シヤカの葉を車の輪立に准ふ。長柄とみるへし。尤、真木両方同木、花、同草花をよしとす。朱

雀院の一の御はらの姫宮と、六条のみやす所との、車たて所をあらそひし故事と心得へし。

愚按曰、葵[14]小アフヒ、トヽ云草也といふは、緒かつら露葵、滑菜トモ書とも二葉草とも云草にて、（図A）かくの如くにして活花に用る草にはあらず。賀茂[15]の祭に宮人の冠の髻にさすは、此草也。（図B）図の如し。御伝[16]の葵といふは蜀葵戎葵、呉葵と云草にて、花葵カラアフヒ、トモ云、銭葵なと云草なり。

然とも、葵の名に通ふ故に蜀葵をいくると知るへし。また[17]、此巻に松竹を活る習あり。

源氏祝

はかりなき千尋のそこのみるふさのおひゆくすゑはわれのみそみん

さて、竹を千尋の陰といひ、松は海松に准ふ也。又[18]、護魔をたきけるにたとへて、香気高き花を活ること習あり。又、しのぶ草[19]萱草ことの也の、又、紅白の花[20]を活事あり。源氏、服をぬぎかへ給ふニかたどる。又、時雨柳[21]を活る。是は、「十月のことなれば、時雨ふりあれて、今更、御涙をもよほす」といふ詞あり。又、猫柳[22]をいくるもよし。是を「みかのよの餅ゐ」といふにたとふ。猫柳を餅柳とも、柳もちともいひて、祝のもの也。又、菊[23]をもいくる。是は新枕といふ詞に縁あり。いにしへは菊枕とて、菊を枕に入て其香を称するとかや。唐土にも有事也。

九　葵（物怪）若紫の上。葵、鳶尾。

【訳】賀茂の葵祭に、光源氏が紫の上と同じ車に乗られて見物された時、葵の上の車と六条御息所の車とが車の置き場所を争って、六条御息所の車を（葵の上の一行が）破損したお恨みがあり、八月の頃、（六条御息所は）物の怪となり葵の上の命をお取りになったという、恐ろしい物語がある。また、紫の上の御髪を光源氏がお削ぎになる。賀茂の祭に髪削ぎ、というのはこれである。御髪を削ぎ終わって祝いの和歌、

測りようもない千尋もある海の底の海松房が伸びていくように、あなたの御髪の伸びていく将来は、この私だけ

図A

図B

が見届けよう。

師伝によると、この形は葵を二本同じ高さに活け、鳶尾(しゃが)をあしらうのがよい。鳶尾の葉を二枚出すのがよい。車争いの形である。さて、季節の花は何の花でも、先端を同じように揃えるという決まりがある。これは丈競(たけあてそ)いといって、ほかの花の形では嫌うことであるが、この花の形だけ定めとするのである。鳶尾の葉を轍(わだち)（車輪が通った跡の窪み）に準える。（または）長柄(ながえ)と見るのがよい。とりわけ、中心の草花は両方とも同じ木、花、同じ草花を良しとする。朱雀院と同腹の姫宮と六条御息所との、車の置き場所を争った故事と理解しなさい。

愚案によると、葵（小葵という草である）というのは、諸葛（露葵、滑菜とも書く）とも二葉草ともいう草で、（図A）このようであるから、活け花に用いる草ではない。賀茂の祭に宮廷人の冠の髻(もとどり)に挿すのは、この草である。（図B）図のようである。師伝の葵というのは蜀葵（戎葵、呉葵）という草で、花葵（唐葵ともいう）、銭葵などいう草である。しかし、葵の名に通じるために蜀葵を活けると知るがよい。また、この巻に松竹を活ける決まりがある。光源氏が詠んだ祝いの和歌、

測りようもない千尋(ちひろ)もある海の底の海松房(みるぶさ)が伸びていくように、あなたの御髪の伸びていく将来は、この私だけが見届けよう。

さて、竹を千尋の陰といい、松は海松(みる)に準えるのである。また、護摩を焚いたことにたとえて、よい香りのする花を活ける決まりがある。また、忍草（萱草のことである）の、また、紅白の花を活けることがある。光源氏が喪服を脱ぎ替えなさることに似せる。また、時雨柳を活ける。これは、「十月のことなので、時雨が降り荒れて、今改めて御涙を催す」という言葉が（物語に）ある。また、猫柳を活けるのもよい。これを三日夜の餅のことをいうの

『源氏流極秘奥儀抄』注釈（一）1桐壺～11花散里

にたとえる。猫柳を餅柳とも柳餅ともいって、祝いの物である。また、菊をも活ける。これは新枕という言葉に縁がある。昔は菊枕といって、菊を枕に入れて、その香りを称するとかいうことだ。唐土にもあることである。

【注】1「賀茂の葵祭りに、源氏の君、紫の上とおなし車にめして、御見物ありし時、紫の上の車とみやす所の車と、たて所をはあらそい（争い）、みやす所ノ車、そんしたる（損じ）御うらみありまいらせ候て、仲秋のころ、もの丶けとなり、あおひの上の命、とりたまひける。車おそろしき物語にておはしまし候」（『龍野』）「加茂の葵祭」は、京都の上賀茂神社と下鴨神社の祭。フタバアオイの葉を社前や桟敷の簾などにかけ、また参列の諸役の衣冠につけたことからいう。古くは陰暦四月の中の酉（なかとり）の日に行なわれていたが、一八八四年以降に新暦五月一五日の祭となった。　2「むらさきの上の御くしを源氏そかせ給ふ」（『小鏡』）祭の当日、光源氏は紫の上の髪の末を切り揃える。普段は女房が行うが、この日は代わりに光源氏が特別に行なう。　3「かものまつりに、「かみそき」といふことをは、これと心えへし」（『小鏡』）　4「御くしそきはて丶、千尋（ちひろ）といはひて、御歌（うた）けんし、よみ給ふ」（『小鏡』）「千尋」は、紫の上の髪の毛が千尋（非常に長いこと）も長く伸びるように、という祝い言。　5巻名歌。「千尋」の祝い言の縁から、千尋もある深い海底に生息する海松房を、紫の上の髪の美しさに例えた源氏の和歌。「海松」は緑藻類ミル科の海藻。それが群生しているのを「海松房」といい、美しい髪の毛にたとえる。「我のみぞ」は独占する気持ち。　6「此形、葵弐本、同し高サニ生、しやか（射干）を応答へし」（『龍野』）　7「尤、前へ、しやが葉二枚、出し候」（『龍野』）　8「車あらそいの心なり」（『龍野』）　9「時節の花、何にても末を同しやうにして生ルを第一とする」（『龍野』）　10「是を、たけく（丈比べ）らへと申て、外の花かたにては（花形）嫌ふ也。此花形斗、たけくらへ（丈比べ）を第一の習とスル也」（『龍野』）　11「前へ出スしやか（射干）の葉は、車のわたち（轍）と見、長柄と見るへし」（『龍野』）「長柄」は、牛車の前方に長く出た二本の棒。その先端に牛を

付ける。　12「両方、同し木花、同し草花にて仕立ルなり」（『龍野』）　13「源氏の御あに朱雀院の一御はらの姫宮、かものいつきに、そなはり給ふ」（『小鏡』）朱雀院と同腹の姫宮が「賀茂の斎（いつき）」（賀茂神社に奉仕する斎院）に選ばれ、賀茂の祭（葵祭）で賀茂神社に参向した。六条御息所と争ったのは姫宮ではなく、葵の上（左大臣と大宮の娘）であり、これは『小鏡』を読み間違えたか。　14ウマノスズクサ科フタバアオイ属の多年草。地下茎から出る短い地上茎に、二枚のハート形の葉をつける。　15供奉する人々が冠帽に葵桂（あおいかつら）（桂の枝にフタバアオイを掛けたもの）を飾るなど、平安時代から葵祭の神事に用いられる。髻（もとどり）は、髪を頭の上に集めて束ねたところ。　16蜀葵（からあおい）は立葵（たちあおい）の古名で、アオイ科の多年草。茎は高さ二メートル余りに直立し、葉はハート形で五～七の浅裂がある。注14の植物とは別科異種。　17「千尋の陰」は竹を意味する。たとえば、松永貞徳の和歌「世の中のすぐならぬ友を軒端（のきば）には千尋の陰や植ゑて見るらん」（逍遊集・巻六・雑歌・三〇五三・竹為友）などがある。　18『源氏物語』では、物の怪に悩まされる葵の上のために、物の怪調伏の加持祈祷が行われる。その際、護摩を焚くときに芥子を焼くが、その芥子の香りが自身の衣に染み付いていることに六条御息所は気づく。　19「しのふくさ（かたみの事）にはめる御そ（けんしふくをぬき給ふ）」（『小鏡』）葵の上を亡くした光源氏は、喪服に着替えて喪に服す。萱草（かんぞう）はユリ科ワスレグサ属の多年草で、夏に黄赤色の花を数個つける。葵の上は光源氏の正妻となり夕霧を出産するが、六条御息所の生霊に悩まされて亡くなる。忘れ形見となった夕霧を見て、光源氏は「何に忍ぶの」とつぶやく。それは、「結びおきしかたみのこだになかりせば何に忍ぶの草を摘ままし」（後撰和歌集・雑二・一一八七・兼忠朝臣母の乳母）による。「かたみ」に「筐（かたみ）」と「形見」を、「こ」に「籠（こ）」と「子」を掛ける。「忍ぶ草を摘む」は、思いしのぶという意味。　20葵の上の喪が明けた後、光源氏は喪服（当時はねずみ色）を脱いで、いつもの華やかな衣装に着替える。それを「紅白の花」で表わしたか。

21「十月の事なれば、時雨ふりあれて、いまさら御なみたをもよほす」（『小鏡』）「時雨」は晩秋から初冬にかけて、降ったり止んだりする小雨。頭中将（葵の上の兄弟）が訪れた初冬、光源氏は涙を催す。　22「みかのよのもちゐ」（『小鏡』）「三日の夜の餅」は三日目の夜に、帳中で新郎と新婦が祝って食べる餅。当時は新郎が三夜、続けて新婦のもとに通わないと、結婚は成立しなかった。猫柳はヤナギ科の落葉高木。早春に葉に先立って出る花穂の銀毛を、猫の尻尾に見立てた名称。　23「にゐまくら」（『小鏡』）「新枕」は、男女が初めて共寝すること。「菊枕」は干した菊花を入れて作った枕。

（丹羽雄一）

十　榊

榊の巻とは、六条のみやす所の御娘、斎宮に伊勢下り給ふに、先清まりて、野の宮にすみ給ふ所へ、さすがに忘れもはてず、なごりおしくおぼして、源氏君、ころは九月七日八日の夕月夜はなやかにさしいてゝ、物あはれにておほしめし出て、あじろの車のしのびやかなる、うちやつれたるさまして、かの野宮へ参り給ひしに、御前の榊をいさゝか折て、みすのうちに入て物語し給ふ。

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまかへておれる榊そ

榊

御伝、曰、此形、榊を真木として、時節の花を生べし。但し、花二色を以、一色は高く一色は低く、み木の裏よりさし、忍ぶ姿に生へし。頃は九月七八日と心得へし。

愚案、曰、文杉をみ木とするもよし。歌によれり。又、白花を月に准て活るもよし。半開花、習あり。「夕月夜は

なやかにさし出て」と云詞(イフコトハ)により生(イクル)る也。「秋(アキ)の草かれ〳〵」[12]と云詞(コトハ)により、薄(スヽキ)、尾花(オハナ)[13]、かるかや等もよし。又、馬蘭(ハラン)[14]もよし。八十瀬(ヤソセ)の波(ナミ)[15]にたとふ。

十　榊。少納言。榊、時節の花、薄(スヽキ)、尾花、かるかや。

【訳】榊の巻とは、六条御息所の御娘が、斎宮として伊勢にお下りになるので、まず精進して、（嵯峨野の）野宮(ののみや)に住んでおられるところに、（光源氏は）さすがに（六条御息所が）忘れきれず、名残惜しくお思いになって、光源氏は、頃は九月七日か八日の夕月が美しく差し出て、なんとなくしみじみと思い出されて、網代車でひそかに、目立たない様にして、あの野宮へ参られたときに、（光源氏は）神前の榊を少し折って、御簾の内に入れてお話しになる。

ここの神垣には目印の杉もないのに、（あなたは）どう間違えて榊を折っ（て訪れ）たのですか。

師伝によると、この形式は榊を中心として、季節の花を活けるのがよい。ただし、二色の花を使って、一色は高く一色は低く、中心となる木の裏から挿し、人目を忍ぶ姿に活けるのがよい。時期は九月七日か八日と心得るがよい。

愚案によると、文杉を中心にするのもよい。（杉を使うのは）和歌に基づいている。また、白い花を月になぞらえて活けるのもよい。半開の花に、決まりがある。「夕月が美しく差し出て」という言葉によって活けるのである。「秋の草は枯れ枯れ」という言葉によって薄、尾花、かるかや等もよい。また、馬蘭もよい。（馬蘭は）「八十瀬の波」にたとえる。

【注】1「六条の宮す所の御むすめの、さいくうにいせへ下り給ふに、まつ、きよまりして、の丶宮にすみ給ふ所へ、さすかにわすれもはてす」（『小鏡』）　2「なこりも、おしくおほして」（『小鏡』）　3「ころは九月七日八日の夕月夜、はなやかにさし出て、よろつ物あはれにて、おほしめし出て、あしろの車のしのひやかなるに、うちやつれたる

さまして、かの野の宮へ、けんし参り給ひて」（『小鏡』）「あじろの車」は網代車。牛車の一種で、四位・五位・少将・侍従は常用とし、大臣・納言・大将は略儀や遠出用とする。光源氏はこのとき大将で、人目を忍ぶために使用した。車体を竹や檜の薄板で網代に組んで覆うことから、この名称がある。　4「御まへの榊を、いさゝかおらせ給ひて、みすのうちへ、さしいれて、物かたりなとし給ふおりの歌そかし」（『小鏡』）　5巻名歌。「しるしの杉」は、「わが庵（いほ）は三輪（みわ）の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（私の家は三輪山のふもとです。私を恋しく思うなら、門の脇にある杉を目印に訪ねてください）（古今和歌集・雑下・九八二・よみ人しらず）を踏まえる。光源氏は、「常緑樹の榊のように、私の愛情は変わらないのに」と訴えたのに対して、六条御息所は、「野宮には目印の杉はなく、あなたを招く気はない」とはぐらかす。　6「此形は、榊を身木にして、時節の花を生ル也」（『龍野』）　7「時節花、二色かよし」（『龍野』）　8「一色たかく、一色ひきく、身木のうらよりさし、しのふ心に生へし」（『龍野』）　9「文杉」は杉または槙（まき）の一品種。宝永六年（一七〇九）に刊行された貝原益軒『大和本草』には、「綾杉」の注に「古歌多詠之（クズヲ）」（昔の歌によく詠まれる）とある。　10注5の和歌にある「しるしの杉」を指す。　11旧暦九月七日八日は半月の頃で、半分開いた花を月に例える。12「秋の草かれ〳〵」（『小鏡』）源氏が野宮を訪れた旧暦九月は晩秋。13「薄」は秋の七草の一つ。秋に「尾花」と呼ばれる白毛の長い穂を出す。「刈萱」も尾花に似た穂を秋に出す。14「馬蘭」は7紅葉賀の巻の注18参照。　15「八十瀬の波」（『小鏡』）別れ際の光源氏の歌「ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじや」（私を振り捨てて行っても、鈴鹿川の八十瀬の波にあなたの袖は濡れないだろうか。別れを悔いて涙しませんか。）と、六条御息所の返歌「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ」（鈴鹿川の八十瀬の波に袖が濡れるか濡れないか、私が行く伊勢まで誰が思ってくれるでしょうか。）を踏ま

える。馬蘭の葉の筋を波に見立てたか。

（八木智生）

十一　花散里

中河の渡りに、桐壺の女御の御妹三の君すみ給ひて、琴を弾し給ひしを、源氏忍ありき給ふ折から、さゝ給ひて立より、むかしの契をかたりあひ給ひし時、郭公のなく音に、和歌を詠し給ひしことあり。さみだれのころ、ほとゝきす、橘も折にふれたる、おもしろき風情なり。さてこそ、花ちる里となつけられたれ。

橘の香をなつかしみほとゝきす花ちる里を尋てぞとふ

花散里

御伝曰、此形、卯花也。又、時節の珍花を一輪生る也。其前に糸芒あしらへ也。尤陰花よし。卯花は時鳥とみるべし。珍花は三の君、糸芒は琴と心得へし。頃は五月雨としるへし。

愚按曰、糸芒を琴と准ふとあれども、時節五月雨のころなれは、糸芒は秋也。フトヰ、菅なと、琴に准ふもよし。又、松もよし。松風といへば、琴のこととなる也。古歌に、

ことのねに峰の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん

斎宮女御、此歌によりて、松を以、琴に准ふ習也。又、蜀葵を活事よし。是をほとゝきすに准ふ。蜀魂といへば也。又、橘とは実の赤き小木にはあらず。蘆橘とてミカンのこと也。おもひ誤るへからす。

十一、花散里。冷泉院。卯花、時ノ珍花、糸芒。

【訳】中河のあたりに、桐壺の女御の妹君である三の君がお住みになって、琴をお弾きになったのを、光源氏が人目

を忍んで出歩きなさるちょうどその時、酒をお与えになって立ち寄り、昔の契りを語り合いなさった時、ほととぎすが鳴く声に（感じて）、和歌をお詠みになったことがある。五月雨（さみだれ）（梅雨）の頃、ほととぎす、橘も、その折節に合っているのは、すばらしい情趣である。だからこそ、花散里と名付けられた。

（昔の人を思い出す）橘の香りが懐かしいので、ほととぎすが（橘の）花が散るこの邸を探してやってきた（ように、私もあなたに引かれて会いに来ました）。

師伝によると、この形式は卯の花である。また、季節の珍しい花を一輪活けるのである。その前に糸芒をあしらうのである。最も陰花がよい。卯の花はほととぎすと見るのがよい。珍しい花は三の君、糸芒は琴と心得るのがよい。時期は五月雨（の頃）と理解するのがよい。

愚案によると、糸芒を琴になぞらえると（師伝に）あるが、季節は五月雨の頃なので、糸芒は秋である（から、ふさわしくない）。フトヰ、菅などを琴になぞらえるのもよい。また、松もよい。松風と言えば、琴のこととなるのである。古歌に、

琴の音に峰の松風の音が似通っているらしい。（いったいあの松風は）どの山の尾（お）、どの琴の緒（お）から、（美しい音を）奏で始めたのだろうか。

斎宮女御のこの歌により、松をもって琴になぞらえる決まりなのである。また、蜀葵を活ける事もよい。これをホトトギスになぞらえる。（ホトトギスの別名を）「蜀魂」と言うからである。また、橘とは実が赤い小さな木（のこと）ではない。蘆橘といって蜜柑のことである。勘違いしてはならない。

【注】1「中川の渡りに、桐壺の女御の御妹、三の君、住み給ひて、琴をたんし（弾じ）給ひしを」（『龍野』）「中河」は京極

川。「桐壺の女御」とあるが、『源氏物語』では桐壺帝の女御の一人で、麗景殿の女御のことである。「御妹、三の君」は麗景殿女御の妹、後に花散里と呼ぶ。かつて宮中あたりで光源氏とかりそめの逢瀬をかわした。『源氏物語』では、光源氏は花散里の邸を目指す道中、中河のあたりで琴の音に惹かれ、そこが昔の女の家だと知る。『龍野』では花散里がこの昔の女と同じ人のように書かれているが、物語では別人である。　2「源氏しのひありき給ふ折から」（『龍野』）「けんし、中川のあたりへ、しのひておはしまし、に」（『小鏡』）光源氏は目立たないよう、忍んで出かけた。3「さゝたまわりて、むかしの契りをかたりあひ給ひし時」（『龍野』）『源氏物語』に「笹（笹）」（女房詞（ことば）で酒の意味）の記述はなく、麗景殿の女御と亡き桐壺帝のころの思い出を語り合っているとき、ほととぎすが鳴く。　4「ほとゝきすのなく音に、和歌を詠したまひし事、ありまいらせ候」（『龍野』）注1の昔の女の家を光源氏が通り過ぎにくそうにしていると、ほととぎすが鳴いて来る。その後の贈答歌（光源氏）「をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根に」（女）「ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおぼつかな五月雨の空」では、二首とも光源氏をほととぎすに例えている。ほととぎすは五月に渡来し、八～九月に南方へ去る。古くから夏の鳥として親しまれ、異名も多い。　5「五月雨の空」「これらはみな〳〵、さみたれのころなれは、「ほとゝきす」にも「たちはな」にもつくへし」（『小鏡』）「五月雨」は字のごとく陰暦五月に降り続く長雨のこと、またその時期のこと。「橘」は、古来食用とされたミカン類の古名。「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今和歌集・夏・一三九・よみ人しらず）などにあるように、その香りは懐旧の念を起こさせるものとされた。また、「橘の林を植ゑむほととぎす常に冬まで住み渡るがね」（万葉集・巻十・一九五八）のように、古くは『万葉集』において橘とほととぎすは一緒に詠まれた。　6「此巻、はなちるさとゝいふ事、たちはなのかをなつかしみほとゝきすはなちるさとをたつねてそとふ、

といふ歌のゆへになり」（『小鏡』）和歌は次の注7を参照。「花散里とは、此巻にておはしまし候」（『龍野』）　7巻名歌。光源氏が自らをホトトギスになぞらえ、昔の人への恋の情調とともに桐壺帝在世への懐旧の念を詠む。この歌の「花散里」は麗景殿女御の邸宅を指すが、三の君の呼称にも巻名にもなった。「橘の花散る里のほととぎす片恋しつつ鳴く日しぞ多き」（万葉集・巻十・一四七三・大伴旅人）のように、『万葉集』から「橘」「花散里」「ほととぎす」の取り合わせが見られる。　8「此形は、卯の花なり」（『龍野』）卯の花は梅雨の頃、白色の五弁花を円錐花序につける。ホトトギスと同じく夏の風物の一つ。「卯の花の散らまく惜しみほととぎす野に出で山に入り来鳴きとよもす」（万葉・巻十・一九五七）など古くからホトトギスと一緒に詠まれる。　9「時節の珍花を一輪そへ、生ル也」（『龍野』）　10「その前に、糸薄、応答へし」（『龍野』）「糸芒」はススキの園芸品種で茎・葉・穂ともに細く小さい。その葉の細さから、琴の緒に見立てられ、琴に喩えられたか。　11「尤、陰花よし」（『龍野』）『いけばな総合大事典』（主婦の友社、一九八〇年）によると、藤や花菖蒲のように、「花がうつむいているものや、あおぐように咲くもの」を「陰木」「陰草」と総称する。逆に梅や菊のように、「梢から花の咲き出すもの」を「陽木」「陽草」と呼ぶ。「陰花」の例は、49宿木の巻にある。　12「卯の花は、時鳥と見るへし」（『龍野』）　13「珍花は三の君、糸薄は琴と心得へし」（『龍野』）　14太藺はカヤツリグサ科の多年草で、各地の沼地に生える。葉は退化して褐色の鞘状または鱗片状。茎で花筵などを編む。　15「菅」はカヤツリグサ科の植物の総称。注14の「フトヰ」も現在で言う「菅」になるが、ここでは別の植物を指すか。どちらも葉が線形であるため、琴の緒に見立てられたのだろう。　16松風が琴の音に調和するのは1桐壺の巻の注16、楽器の音に調和するのは7紅葉賀の巻の注5を参照。　17「琴の音に」の和歌（拾遺和歌集・雑上・四五一）は、山の「尾」と琴の「緒」を掛ける。松風の音が琴の音に似通うことから、松風を

琴の奏楽に聞きなした。　18注17の和歌の詞書に、「野宮に斎宮の庚申し侍りけるに、松風入二夜琴一といふ題を詠み侍ける」とある。斎宮（村上天皇皇女の規子内親王）が伊勢に下向する前に、精進潔斎する仮宮である野宮（ののみや）で、母である斎宮女御が詠んだ歌。「庚申待ち」は庚申の日に、仏教では帝釈天・青面（しょうめん）金剛、神道では猿田彦を祀って徹夜をする行事で、この夜眠ると体内にいる三尸（さんし）の虫が抜け出て天帝に罪過を告げ、早死にさせるという道教の説による。歌題の「松風入二夜琴一」は、唐の李嶠『雑詠百二十首』「風」詩中の句。　19「蜀葵」は9葵の巻の注16参照。「蜀魂」はホトトギスの異名であるので、「蜀葵」になぞらえる。『華陽国志』『蜀王本紀』などにある、蜀の望帝の魂がホトトギスになったという伝説に基づく。　20「橘」は注5参照。「実の赤き小木」は「山橘」とも呼ばれるヤブコウジ科の低木のことか。ヤブコウジ科は夏に花を咲かし、冬に小さい赤い果実をつける。「蘆橘」は金柑の異名で、ミカン科の常緑低木のこと。現在では橘と金柑は区別されるが、ここでは食用になるミカン類として一括りにされたか。

（湯本美紀）